翻　訳

A.M. カミシェフ著「チュー川流域における中世初期コインの新発見」

山内　和也※1・吉田　　豊※2

※1･2　帝京大学文化財研究所

訳者前書き

A.M. カミシェフ著
「チュー川流域における中世初期コインの新発見」

訳者前書き

本論文は古銭を扱うロシアの雑誌であるНумизматика の第16号（2008年２月）pp.18-20に掲載されたA.M. Камышев、“Новые находки раннесредневековых монет в Чуйской долине” の日本語訳である。

この翻訳に先だって山内と吉田は、カミシェフ Камышев が2002年に発表したアク・ベシム遺跡出土のコインに関する論文 “Подъемный нумизматический материал с Ак-Бешимского городища”「アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料」を翻訳していた（その翻訳も本誌に掲載されている）。この論文の翻訳の許可を求めるためにカミシェフ氏に連絡した際、2008年に氏が発表した内容的に関連する論文があり、2002年の論文にはない新しい情報を追加していると知らせて下さった。そして氏から論文原稿のワードファイルと図版の写真の提供を受けた。一読すると、この論文は2006年にアク・ベシム遺跡で発見された62枚の一括出土コインを扱っており、アク・ベシム遺跡出土のコインの年代や種類を知る上で極めて貴重な情報を含んでいることが分かった。そこでカミシェフ氏の許可を得て急遽この論文の翻訳も本誌に掲載することにした。ここに論文の原稿と写真を提供して下さったカミシェフ氏に心から謝意を表すものである。なおこの翻訳は山内と吉田が、機械翻訳ソフトを援用して翻訳された英文とロシア語原文、さらに関連する先行研究を対照しながら行っている。

実際にНумизматика 誌に掲載された論文を見てみると、図版は下に示すFoto 1-7であって、２種類のコインの表裏の写真と、６種類の貨幣の片面の写真があるだけである。また本論文では、カミシェフ氏が2002年に出版していた単著Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья. — Бишкек: «Раритет-Инфо», 2002. — 145 с.［A.M. カミシェフ『中世初期のセミレチエのコイン群』ビシュケク、ラリテト－インフォ、2002、145 pp.］で発表されている多数のコインの模写（拓本）に言及しているが、紙面の関係からであろう、図は引用されていない。しかしそれらは本文の理解には重要となるため、本翻訳にはそれらの模写も提示することにした。そしてそれらをカミシェフ氏から提供された9枚の写真（およびそのうちの一括出土コインの写真＝図１から切り取った写真）と合わせ、図１～25の番号を与えたうえで、本文中の適切な箇所で参照できるようにした。当該箇所の本文と比較すれば、図にキャプションを添える必要はないだろう。これらの新しく追加した図によって、本翻訳はロシア語原文よりはるかに情報量が多く、読みやすくなっていると自負している。

コインの銘文のソグド文字表記や翻訳に関しては、原文を少し改めているが、そのことは2002年論文の前書きを参照されたい。また「トゥフス・コイン」と呼ばれているコインの銘文は wn’ntm’x xwβw と読まれるが、「トゥフス」という名称の方は銘文の誤った読み twxwsš に基づいている。そしてこの名称は、チュー川流域にいた民族としてイスラーム史料に見えるTukhs族と関連付けられてきた。しかるに wn’ntm’x は「勝利神である月神」というほどの意味のごく一般的なソグド語の人名であるから、このコインを最初に発行した地域の領主の名前であったと考えるのが妥当である。この点については吉田豊「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57、2018、pp.155-182（特にpp.156-160）を参照されたい。

いっぽう本論文では、シシ・テュベで新たに発見された片面に βγy x’rlwγ x’γ’n pny「神なるカルルク

可汗の銭」という銘文があるコインについての考察がある。この銘文の x’rlwγ「カルルク」は xr’lwγ と読む可能性もある。その点については、吉田豊「上掲論文」pp.160-161 を参照されたい。このコインの片面には kwp’k（pwp’k）xwt’w とあり、カミシェフはその xwt’w「王」について、とりわけ高い称号であると考え、kwp’k はカルルクの可汗その人の名前であると見なしている。しかしソグド語では xwβw「王、領主」と xwt’w は同義語であり、xwt’w はとりたてて高い称号ではないから、この理解には大いに問題がある。ソグド語において xwβw/xwt’w より高い称号は、’xšyδ「帝王」であり、カミシェフはそれと混同しているのかもしれない。要するにカルルク可汗のコインの銘文の表裏の関係は、片面にテュルゲシュ可汗の銘文がある wn’ntm’x（つまりトゥフス）コインの銘文の表裏の関係と並行する：

カルルク・コイン：βγy x’rlwγ x’γ’n pny　/ タムガ + kwp’k（pwp’k）xwt’w
wn’ntm’x コイン：βγy twrkyš x’γ’n pny　/ タムガ + wn’ntm’x xwβw

このように見てみると、wn’ntm’x がテュルゲシュ可汗の下でアク・ベシム遺跡周辺を支配していた領主であったのと同様に、kwp’k（pwp’k）という王（あるいは領主）は、カルルクの可汗の支配の下で、一定の地域を治める領主であったという解釈の方が妥当であろう。残念ながら kwp’k ないし pwp’k がソグド語の人名なのかチュルク語の人名なのかは分からない。またこのことと関連して、突厥ルーン文字の「R」に似ているとするタムガが、カルルク部族を象徴するものかどうかも、改めて考え直す必要も出てこよう。

研究報告の本誌には、カミシェフの論文を２点翻訳して掲載しているが、それらの刮目すべき主張は、チュー川流域では８世紀初めに開元通宝と同じ重量のテュルゲシュ可汗のコインが発行されたが、その後８世紀後半以降中国本土の経済的な混乱や、それにともなうコインの重量や大きさの変化と連動し、テュルゲシュ可汗のコインや、彼が「トゥフス・コイン」と呼んでいるコインに大中小の３種類が存在するようになったこと、そしてその状況が10世紀まで存続していたらしいというものである。つまりソグド語の銘文とともなうコインの研究では今なお権威と認められているスミルノヴァ О.И. Смирнова が、この地域ではソグド本土の影響で最初７世紀後半にトゥフス・コインが発行されていたとする、我が国の護雅夫も受け入れている説を真っ向から否定している。ちなみに吉田も上掲論文でカミシェフと同じ主張をしている。もう１つ重要な点は、チュー川流域では、サマルカンドなどのソグド本土で発行されたコインがほとんど見つからないという点である。このことはイスラーム化以前のチュー川流域は、ソグド商人たちが居住していたとは言え、本土とも独立した固有の経済圏を形成していたことを示唆している。カミシェフ氏はこの地域の古銭の出土状況にもっとも詳しいが、氏自身が我々に送ってきた私信でも述べているとおり、考古学者として遺跡を発掘する機会がなかったため、彼のこの重要な主張を検証することができなかった。これは帝京大学のチームの今後の発掘における重要な課題の１つとなる。

Фото 1- 2. Монета *Карлкуского кагана*

Фото 3-4 Монета *Инал- тегина*

Фото 5. Местное подражание монете *Кайюань тунбао*

Фото 6. Монеты с легендой *Фан господина тюргешского кагана* с дополнительной карлукской тамгой

Фото 7 Монета с иероглифом *«да»*

A.M. カミシェフ著
「チュー川流域における中世初期コインの新発見」

中世初期のセミレチエのコイン群については、近年、これまで知られていなかったタイプのコインを含め、新たなコインが発見されたことによって、2002年の著書[1)]にいくつかの修正と追加を行うことが可能となった。

2006年10月、防御壁で囲まれた都市遺跡アク・ベシム（チュー川流域にある中世初期の都市スイヤブで、現在のトクマクの南東８km）の東側入口からそれほど遠くない地点で、約２×2m、深さ30㎝の小さな区画から62枚の鋳造製のブロンズ・コインが採集された［図１][2)・訳註1)]。この［一括出土コインに］選択されたものの構成は珍しいものであり、さまざまな直径のテュルゲシュ、トゥフス、中国のコインが一緒に見つかった初めての例である。これらのコインのタイプについてはすでに記述してあることから［Камышев 2002］、この論文ではその番号のみを記す。

1．中型のテュルゲシュ・コイン、直径20～21㎜、No.29：６枚［図２、3（Камышев 2002, p.95, No.29）］
2．オモテ面［ウラ面の誤植か］に追加のタムガをともなうテュルゲシュ･コイン、直径19～20㎜、No.30：17枚［図４、5（Камышев 2002, pp.95-96, No.30）］
3．小型のテュルゲシュ・コイン、直径15～17㎜、No.31：12枚［図２、6（Камышев 2002, p.96, No.31）］
4．縁が鋸歯状になったイナル・テギン Inal Tegin のコイン、直径21㎜、No.34：１枚［図７、８（Камышев 2002, p.97, No.34）］
5．大型のトゥフス・コイン、直径20㎜、No.39：７枚［図９、10（Камышев 2002, p.99, No.39）。なお、図９と図10ではコインのオモテ面とウラ面の提示の仕方が左右逆になっていることに注意］
6．方孔が広がっているトゥフス・コイン、直径17㎜、No.41：３枚［図11（図１の部分拡大）、図12（Камышев 2002, p.100, No.41）］
7．中型のトゥフス・コイン、直径16㎜、No.42：６枚［図13（Камышев 2002, p.100, No.42）］
8．銘のないコイン、直径８～13㎜、No.32：９枚［図14、図15（Камышев 2002, p.96, No.32）］
9．建中通寶（780～783年）、直径22㎜、No.12：１枚［図16（図１の部分拡大）、図17（Камышев 2002, p.89, No.12）］

この遺跡では散発的にいくつかのコインが出土しているが、これまで採集されたコインの統計に重要な変化を及ぼすものではなかった。しかしそれらに加えて、2007年には別の３つの一括出土コインが発見されており、それは、さまざまなタイプのコインが同時に流通していたことを示しているという点でより興味深いものであった。西側の防御壁から約200メートル離れた耕作地では、くっついた４枚のコインの柱［状の塊］が２つ採集された。第１のもの［一括出土コイン］は、直径15～16㎜の小型のテュルゲシュ・コイン（No.31）３枚［図２］と、直径16㎜の中型のトゥフス・コイン（No.42）１枚である［図13］。第２の一括コインは、直径15～16㎜の小型のテュルゲシュ・コイン３枚、「元」の文字をともなう中国コイン１枚（No.13）［図18、図19（Камышев 2002, p.89, No.13）］からなっており、青銅製の針金で繋がれていた。都市遺跡の南門の入り口から150メートルの地点では、７枚のコインがくっついた状態で発見された［第３の一括出土コイン］。この採集物のうち、５枚のコインは No.32［図14、15］で、直径は10～11㎜で銘がないもの、１枚は No.31［図２、６］の小型のテュルゲシュ･コインで、直径15㎜、そして、もう１枚のコインは直径13㎜で、内側の孔が広がっており、ソグド語を真似た銘をともなっているが、特定できない。すべての出土品［一括出土コイン］に小型のテュルゲシュ・コインが含まれていることから、これらは同じ時代のもの［同時に流通していたもの］とみなされる。

これらのコインには発行年がない［発行年銘がない］ことから、発行された時期についての議論が生じる。この問題については、これまでのところ並行した２つの見解がある。最初の見解は、かつてスミルノヴァ О.И. Смирнова が発表したもので、既知の３つの標準的なサイズ、つまり直径23㎜、20㎜、17㎜およびそれ以下のテュルゲシュ・コインは、８世紀初めにおける貨幣流通の最初の段階で、すでに３つの額面［のコイン］として発行されていたというもの［つまり当初から３種類の額面のコインが発行されていたとする考え］で、現在の研究者のなかに

も［この見解を］支持する者がいる。[3)] そして、２番目の［見解は］、本稿の筆者が証明しようとしているもので、８世紀初めの大型のテュルゲシュ・コインが、インフレの結果、直径、重量が減り、鋳造品質、金属組成が低下することで、徐々に質が悪くなったというものである。［この説によれば］おそらく８世紀後半には、スイヤブで中型のテュルゲシュ・コインが、そして、その後すぐに同じ銘をともなう小型の［テュルゲシュ・］コインが流通するようになった。その後、ナヴェカト（ビシュケクの東35㎞にある都市遺跡クラスナヤ・レーチカ）でトゥフス・コインが発行されるようになったが、これもまたインフレの影響を受けた。そのことは、この一括出土コインにあるように、さまざまなトゥフス・コインが発行されたことで明確に確認できる。しかし、この時代であっても複数の額面［のコイン］が存在していたと言うことはやや無理がある。おそらく構成するコインのサイズに応じて、束としてのコインの購買力が違っていたということであろう。明らかに、直径が小さく、したがって重量の軽いコインからなる［価値の］低い束よりも、大型のコインを束ねたものは、はるかに高い価値があった。おそらく、コインのタイプではなく、重量と直径が決め手であった。したがってこの一括出土コインのように、［タイプは違っていても］直径が類似したコインを集めることは、同じ時代に流通しているコインから［均一で統一のとれた］コインの束を手っ取り早く作成する方法であった。マッソン M. E. Массон の比喩をまじえた定義によれば、一括出土コインは現地の貨幣流通のスナップ写真［ある瞬間の全体像］であり、それが集められた時期について議論する際に、付加的な論拠を与えてくれる。

一括出土コインの半分以上は、「神なるテュルゲシュ可汗の銭」という銘をともなう中型と小型のコインで、そのうちの半分はウラ面には追加のタムガをともなっており、［これまでのところ］おもに都市遺跡アク・ベシムで発見されている［図４、５］。この点に関しては、これまでも、これ［追加のタムガをともなうコイン］はスイヤブの現地（都市）の発行であるとされていた。追加のマーク［タムガ］はルーン文字の「R」に似ており、金属の鋳造用に準備された砂－粘土の鋳型に［あとで］刻印されている。というのも、テュルゲシュの主たるタムガ［弓型のタムガ］との位置関係が一定していないからである。このマーク［追加のタムガ］の位置は、［主たるタムガ、つまり弓型の］タムガの右側、左側、中央にあり、また180度反転しているものもある。また、このマークの押し型が砂と粘土の混合物からなる型に押し付けられた度合い［深さ］も異なっており、いくつかの例では、マークが鋳造されたコインの厚さの半分に及んでいる。このタイプのコインは、ここで取り上げている一括出土コインの中でも数が多く、なかには、ウラ面に異なる２種類のタムガをともなうという新たな変種もある［図４の左から４番目］。このように、現在では、スイヤブで製造されたテュルゲシュ・コインの「刻印」には、少なくとも２つの種類があることが確認されている。この一括出土コインのなかには、おもに都市遺跡クラスナヤ・レーチカで発見されるトゥフス・コインが存在しており、これは、これらの隣接する都市間に密接な交易関係があったことを示している。

「神なるイナル・テギンの銭」［の銘をともなうコイン］は、都市遺跡クラスナヤ・レーチカで初めて発見された。その発行地は確定していないものの、発行の時期は８世紀半ばであるとされている。最近まで、このコインはとても珍しいもの［唯一のもの］であった。この一括出土コインの中にあるこのコインには、鋸歯状の刻みが施されている［図７］。スイヤブでは、このコインは「外来」のコインであり、おそらく装飾品として使用されたようである。しかしながら、一括出土コインの中で見つかったことから、その重量とサイズは、現地で発行された小型かつ軽量のものに合わせて意図的に調整された可能性がある。

この一括出土コインから見つかった中国の「建中通寶」（780～783年［建中は780～784年］）は、中型のテュルゲシュ・コインや大型および中型のトゥフス・コインの年代を確定する決め手となった。このようなコイン群の複雑な共伴関係によれば、これらのコインが流通から外れたのは、まさに８世紀末から９世紀初めでしかあり得ないと結論することができる。

「元」の文字（最近、中国の古銭学者が明らかにしたところによれば、「大」という漢字）をともなう、未発表で、素性の知られていないコイン［図18、19］は、766年から779年に発行された中国のコイン「大暦元寶」（No.11）［図20（Камышев 2002, p.88, No.11）］の質の悪いタイプ［悪銭］である。また、「中」

という漢字１文字をともなう素性の分からないコイン（No.14）［図21（Камышев 2002, p.89, No.14）］は、780～783年［に発行された］「建中通寶」の質の悪いタイプ［悪銭］である。これらのコインはおもに新疆（中華人民共和国）で発見されており、おそらく、そこがこのタイプのコインの発行の中心地であった。時代的にみれば、質が悪くなった［悪銭化した］［コインの］発行は、その原型がもっとも多く流通した時期の後のことであって、８世紀後半から９世紀前半にかけてであろう。そして、小型のテュルゲシュ・コインが流通していた時代を間接的に確認するものである。

この一括出土コインを隠す、あるいは誤って紛失した年代は、テュルゲシュ可汗国に取って代わったカルルクが支配していた時代である。カルルクは、点在するソグド人の諸都市から貢ぎ物を集めていたが、決して、統一された国家を形成したことはないと考えられていた。というのも、カルルクは、自分たちの領土ではテュルゲシュ可汗の名前でコインを発行し続けていたからである。しかしながら、新種のコインの発見は、セミレチエのこの歴史の暗黒時代に関する見解を修正する契機となった。

2007年夏に都市遺跡シシ・テュベ Шиш-Тюбе で１枚のコインが発見された［図22］。［このコインの］銘がサンクトペテルブルクのソグド学者パヴェル・ルリエによって解読されたことで、カルルクの支配についての私たちの知識が大幅に増えることとなった。コインのオモテ面［ウラ面］には、No.45［図23（Камышев 2002, p.89, No.45）］のアルスラン・キュル・イルキンのコインに描かれているものと類似するタムガがあり、その隣に円弧状のソグド語による銘 p/kwp’k（?）、その後にソグド語の xwt’w「王」が続いている。これまで知られているコインには、この高い称号はなかった。ウラ面［オモテ面］［の銘］は βγy x’rlwγ x’γ’n pny「神なるカルルク可汗の銭」と読まれる。したがって、テュルゲシュ可汗国に代わって封建領主となったカルルクは、中央集権的な国家を作ろうとしたことになる。いずれにしても、「プパク Pupak」あるいは「クパク Kupak」という名の人物が、みずからを王と呼び、カルルク可汗を称していたことは間違いない。この［カルルクの］コインの重量と直径は、中型のテュルゲシュ・コインや大型のトゥフス・コインと対応していることから、またもや、これらのコインが８世紀後半の同じ時代に流通していたことを示している。

チュー川流域におけるもっとも大きな都市遺跡の１つであるシシ・テュベ（都市ヌズケト Нузкет / Nuzket に比定される）は、カラ・バルタ Кара-Балта / Kara-Balta の中心部の北側に位置しており、半世紀前の報告によれば、ほかのどこよりも、その地形的な外観を残していた。３つの環状の防御壁が都市を囲み、最後のもの［最外壁］の内側の面積は約50㎢であった。考古学者の年代比定によると、この都市は６世紀に建設された初期のソグド人の植民都市の１つであり、モンゴルの侵攻まで存在していた。いくつかの試掘坑を除いて、この都市遺跡では考古学的な発掘は行われていない[4)]。

その後の年月の間にここでは大きな変化があったが、残念なことに、良い方向への変化ではなかった。ソ連時代に掘られた自噴井により、遺跡の中心部の３分の１は通行不能な沼地となり、さらに残りの部分は都市のゴミ捨て場となっている。考古学者からはあまり注目されてこなかったものの、発見されたコインが都市遺跡シシ・テュベで発行されていたとすれば、カルルク可汗国の本拠地がヌズケトにあった可能性がある。

ここ［シシ・テュベ］では、通常の大型のテュルゲシュ・コインに加えて、アルスラン・キュル・イルキンの銘をともなうコインが６枚発見されている。これまで、この銘をともなうコインは都市遺跡クラスナヤ・レーチカで３枚見つかっているだけである。明らかに、アルスラン・キュル・イルキン、クパク王、そしてイナル・テギンのコインのウラ面にあるタムガは同じものである。それゆえ、カルルク王朝は確かに存在し、その支配下で発行されたコインには、［突厥］ルーン文字「R」の形をしたカルルクの部族マークであるタムガが存在することが必要であったものと推定される。当然ながら、この関連で、［突厥］ルーン文字の「R」に似た追加のタムガが、スイヤブで製造されたコインにも登場したことを思い起こすことは適切であろう。したがって、カルルクは、自分たちの部族のマークをともなう「神なるテュルゲシュ可汗の銭」という銘を持つコインを発行することで、中世の古銭に自らの足跡を残したということになる。

都市遺跡ヌズケトのコイン群に見られるもう１つの特徴は、開元通寶の現地の模倣銭である。非常に重く、孔が丸く、銘がコインのウラ面にも繰り返さ

れている［図24］。これまでは、このようなコインは２枚しか確認されていない。うち１枚は都市遺跡アク・ベシムで発見された重さ15.3gのコインで、もう１枚は都市遺跡クラスナヤ・レーチカで発見された重さ8.3gのものである。これらの［特別に重い］コインは、開元通寶の現地の模倣銭が軽量化するという常識からは明らかに逸脱しており、むしろ古銭学的には好奇の的であった。2007年夏には、都市遺跡シシ・テュベで同じようなコインが８枚採集されていることから、これがヌズケトで発行されたという根拠となるかもしれない。

新たな考古学的発見により、コインの製造技術に関する知識も増えた。2006年には、都市遺跡アク・ベシムのいわゆるカルルク地区[訳註2)]で、コインやその他の小さな青銅製品を鋳造するための青銅製の金枠が発見された［図25］。外寸25×13.5㎝の２つの枠には、ピンと孔で連結する留め具が付いている。枠の上部［図25の左側］には、熔かした金属を流し込むための湯口が付いている。中国文献によれば、コインの製造には「木」の形状をした鋳型が使われており、その幹と枝［の部分］が湯道となり、葉［の部分］がコインとなる。砂と粘土を混ぜたものを槌で枠に叩き込み、鋳型の半分にはコインのオモテ面の型を、もう半分にはウラ面の型を押しつけた。当然のことながら、鋳型は枠の縁に固定されているため、２つの半分の型［オモテ面用とウラ面用］を組み合わせることで、湯道がぴったり合わさるようになっていた。１つの胴型を使用する場合、このような枠で一度に鋳造されるコインの数は、大型［コイン］なら40枚、小型［コイン］の場合は最大150枚に達した可能性がある。中世における鋳造貨幣製造の全工程を復元するには、［枠の他に］さらに鋳型ないしはその断片を発見しなければならない。

［ここで紹介した］新しい出土品は、キルギズスタン領内に貨幣流通が導入された時代に関して［筆者がすでに］提案してきたことを、補完し、より明瞭にするものとなっており、決してその基本的な原則と相反するものではない。

註

１）Камышев А.М., Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья. — Бишкек: «Раритет-Инфо», 2002. — 145 с.［A.M. カミシェフ『中世初期のセミレチエのコイン群』ビシュケク , ラリテト－インフォ , 2002, 145pp］.

２）Камышев А.М., Нумизматические находки с городища Ак-Бешим. // XIV Всероссийская Нумизматическая конференция. Санкт-Петербург, 16-21 апреля 2007 г. Тезисы докладов и сообщений. — СПб., 2007［A.M. カミシェフ「都市遺跡アク・ベシムの出土コイン」第14回全ロシア古銭学会 , サンクトペテルブルク , 2007年４月16～21日, 報告と通信の要約 , サンクトペテルブルク , 2007］.

３）Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., Щербак А.М. Монеты из раскопок городища Ак-Бешим (Киргизская ССР) в 1953-1954 гг. // Ученые Записки ИВ АН СССР. — Том XVI. — М.;Л., 1958. — 532 с.［L.R. クズラソフ , O.I. スミルノヴァ , A.M. シェルバク「1953～1954年のアク・ベシム遺跡の発掘調査中に発見されたコイン（キルギズ・ソヴィエト社会主義共和国）」『ソ連科学アカデミー東洋学研究所の学術紀要）』モスクワ－レニングラード , 1958, 16巻 , p.532］.

４）П.Н. Кожемяко, Раннесредневековые города и поселения Чуйской долины— Фрунзе, 1959. — С.79-84.［P.N. カジミヤカ ,『中世初期の都市集落』フルンゼ , 1959, pp.79-84］.

訳註

訳註１）Камышев, А.М., Нумизматика Кыргызстана, Бишкек, 2014, p.77には、「2006年10月、都市遺跡アク・ベシムの防御壁の東側の斜面、大きさ約２×２m、深さ30cmの小さな区画で62枚の鋳造製のブロンズ・コインが発見された」と記されている。ここでいう「防御壁」は、シャフリスタン１の東壁を指しているものと思われる。

訳註２）カミシェフ氏からの私信によれば、「カルルク地区」はかつて「ラバト」と呼ばれ、現在ではシャフリスタン２とされている地区のこと。

本研究はJSPS科研費JP21H04984（基盤研究（S））（研究課題名：シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷―農耕都市空間と遊牧民世界の共存―、研究代表者：山内和也）の助成を受けたものである。

図１

図２

図３

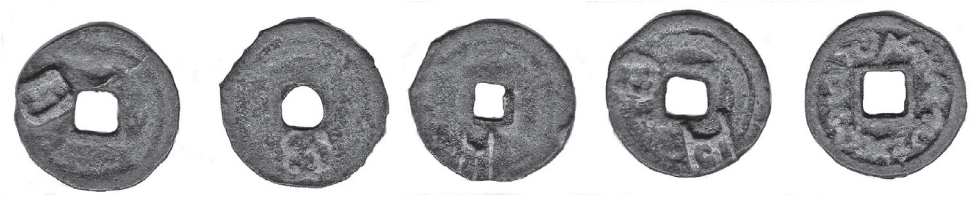

図４

図５

図６

図７

図８

図９

図10

図11

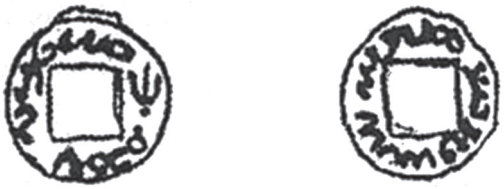

図12

図13

図14

図15

図16

図17

図18

図19

図20

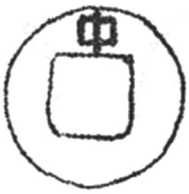

図21

図22

図23

図24

図25